

手根管症候群に対する患者教育法と神経滑走法の  
患者立脚型質問紙および身体機能の短期効果と  
1年後の手術療法の有無による長期効果比較  
非ランダム化比較試験

埼玉県立大学院、保健医療福祉学研究科、博士論文

指導教員 濱口豊太

2023年3月

学籍番号 1991001 久保匡史

手根管症候群 (Carpal tunnel syndrome: CTS) は 40-50 歳代に好発する絞扼性神経障害であり、手の痛みと運動障害を伴って社会生活を脅かす。CTS の保存療法には装具療法が実施されるが、併用療法として症状を自己管理するために患者教育や神経滑走法などの運動療法が行われることがある。しかし、これらの併用療法の短長期成績は明らかになっていない。そこで本研究は、1)患者教育法と神経滑走法は手根管症候群に対して短期効果を認める。2)患者教育法は神経滑走法より短期効果を認める。3)患者教育法と神経滑走法は長期成績として手術選択が少ないという仮説を検証した。CTS 患者を対象にして、患者教育と神経滑走法の短期・長期効果を比較検証した。CTS 患者には全例夜間装具を 1 ヶ月間装着させ、患者教育群には日常生活での禁忌動作の回避、休息指導といった手の動作指導を行った。神経滑走法群には神経滑走運動を指導した。短期効果は質問紙、感覚、筋力を比較した。長期効果は 1 年後の手術療法に移行した患者の割合を後方視的に比較した。その結果、短期的には群間差を認めなかったが、実施前後で 2 点識別覚が改善していた。長期効果として手術の割合は両群に差はなかったが、先行研究と比較して同様の効果を示した。この研究により、仮説 1 は一部支持され、仮説 2 は棄却された。仮説 3 は支持された。